

シンガポールにおける「多人種主義」再考

坂 口 可 奈

はじめに

シンガポールは、東京23区とほぼ同じ面積(710km²)に、約507万人(うちシンガポール人と永住者は373万人)が住む多民族都市国家である。その人口構成は、華人が74.1%、マレー人が13.4%、インド人が9.2%、その他が3.3%(Singapore census 2010: v)となっている。観光客や海外からのビジネスマンも多く、経済や金融の分野で東南アジアのハブ機能を果たしている。しかし、世界中の人々を惹きつける魅力は、経済だけではない。世界でも有数の安全で平和な安定した国というイメージも重要な要因となっている。

人々が持つイメージのとおり、シンガポールは多民族国家でありながら、1964年の「人種」¹暴動以来、エスニック集団間の対立が表面的には起きていない。この点に関しては、多民族国家の国民統合の成功例であると言える。この成功は、権威主義というシンガポールの政治体制によって説明されるかもしれない。しかしながら、権威主義体制をとる他の多民族国家でも民族紛争や民族問題は発生しており、体制にのみ成功の原因を求めることは不適切である。むしろ、シンガポールのエスニック集団間対立の不在は、体制ではなく政府によるエスニック集団の巧みな管理とそれを受容してきたことが原因だと考えられる。その中心となる概念が「多人種主義」である。

「多人種主義」とは、シンガポールの国民統合の根幹を成すイデオロギーで、1965年の独立以来、シンガポールにおける国民統合政策は全て「多人種主義」に基づいて実施されてきた。その

影響は、教育、言語、住居にまで及び、シンガポール国民の生活に深く関わっている。しかし、国民統合の重要なファクターでありながら、「多人種主義」それ自体に関する研究は多くない。Benjaminは「多人種主義」の定義とも言うべき解釈を示し(Benjamin, 1976)、Brownは時代別に「多人種主義」について分析(Brown, 1994)し、鍋倉は団地を舞台として「多人種主義」がシンガポール人の生活に深く関わることを示した。(鍋倉, 1997; 2006; 2011)。その他にも多くの研究者が「多人種主義」について言及している(Clammer, 1982; 1998; Hill and Lian, 1995; Chew, 1987; Chua, 1998a; 1998b; 2003)。

これらの「多人種主義」研究は、おおむね以下の共通点を持つ。すなわち、「多人種主義」の表層にのみ焦点を当て、「多人種主義」を国家と「人種」との関係と捉えている点(Clammer, 1982; 1998; Chew, 1987; Brown: 1994; Hill and Lian, 1995; 鍋倉, 1997; 2006; 2011; Chua, 1998a; 1998b; 2003)、そしてその結果、コーポレート多文化主義(鍋倉, 2006; 2011)とみなしている点である。しかし、「多人種主義」が基礎とする「人種」は、他国のエスニック集団と同列に捉えることはできないため、多民族国家の国民統合という視点では、「人種」のみならずエスニシティ²も考慮しなければならない。Clammerや鍋倉は、エスニシティに注目しながらも、「多人種主義」との関係までは論じていない。エスニシティを考慮しない先行研究のような理解では、「多人種主義」がどのように国民統合に関わっているかについての正確な理解を導くことはできないのである。

そこで、本論文は、先行研究で扱われてこなかったエスニシティと「人種」の関係や公的空間と私的空間の関係に着目して「多人種主義」を分

析し、「多人種主義」の理論的枠組みの一つを提示することを目的とする。多民族国家の国民統合という点で、多文化主義理論の応用は可能だと考えられる。ゆえに、これらを分析の枠組みとする。本論文で得られる知見は、シンガポールの国民統合のメカニズムを解明する一助となり、ひいては多民族国家の国民統合についての新たな可能性をもたらすことになるだろう。

1. 「多人種主義」

1-1 「多人種主義」概要

「多人種主義」は、政府の指導者たちによって、様々なコミュニティに対する文化的寛容（異なったコミュニティの宗教的慣行、習慣、伝統の差異の受け入れ。法の前の全てのコミュニティの平等と進歩のための平等な機会への合意。）の実践とされている（Chan and Evers, 1973 : 308-9）。

リー＝クアンユーが独立時の記者会見で「我々は多人種主義を信奉し、シンガポールをショービニズムから切り離し、多人種主義へと導いた政府」（黄&呉, 1998 : 77）であると自分たち人民行動党について述べたように「多人種主義」という概念自体は独立前から存在した。その始まりは、1940年代と1950年代の初めの華人－マレー人対立によるマレー人意識と華人意識の出現への反応としての英語教育マラヤ人の政治的意識の発展にまで遡る。（Hill and Lian, 1995）。特に1964年にシンガポールで発生した華人－マレー人間の「人種」暴動は、シンガポールの指導者たちに大きな衝撃を与え、二度と繰り返されてはいけない事件とされている。

シンガポールの指導者たちが「多人種主義」を採用した理由は、このような華人－マレー人関係が関わる。まず、マレー人国家である隣国マレーシアとの関係である。シンガポールが独立するまで、マレー人の扱いを巡ってリー＝クアンユー率いるPAP（人民行動党）とUMNO（統一マレー国民組織）は対立していた。特に、書記長のサイド＝ジャファール＝アルバーはシンガポールのマレー人の状況に関して、リーを個人的に攻撃し、裁判となった（Lee, 2000b : 396-397）。水をマ

レーシアに依存しているため、シンガポールは国内のマレー人の不満とともに、マレーシアとの関係を考慮しなければならなかったのである。

華人に関しては、中国との関係と地域的条件の両方を考慮する必要があった。国内の共産勢力との戦いの中でシンガポールが華人国家となることは、共産勢力と中国共産党との関係を強化することに繋がり、彼らを勢いづかせる恐れがあったのである。

国際的な目的にも地域的条件が関係する。シンガポールは、この地域の国家にしては特殊な民族構成をもっている。マレーシアとインドネシアといったマレー人国家にはさまれており、地域的にも世界的にも、当時の冷戦構造の元で華人の国と見られることを避けなければならなかった。そのため、「人種」を平等に扱うことで、多民族国家としての側面を強調しようとしたといえる。

では、「多人種主義」はどのような政策を通して実践されているのだろうか。まず、言語政策を見てみよう。与党の人民行動党（PAP）は、1959年の方針（Goh, 1978 : 2-1）を元に、1965年の共和国独立法でマレー語を国語とするとともに、英語、タミル語、マンダリン、マレー語を公用語とした。英語は、①特定の「人種」を強調しない言語②科学技術分野での使用言語③外国人投資家の使用言語④中立な言語⑤イギリス統治以来の連続性（De Souza, 1980 : 206-207 ; Gopinathan, 1976 : 76 ; 岡部, 1984 ; Tay, 1993 : 13）を理由として制定された。タミル語、マンダリンはそれぞれタミル語学校と華語学校での使用言語だったこと、マレー語はマレー人の共通言語だったことにより公用語とされた。行政文書は英語が使用されているが、街中の案内の表記などは四つの言語が使用されている。

また、独立後の1966年には英語を必修化し、英語と母語の二言語教育を導入した（中村, 2009 : 68）。英語は全員が必修しなければならないという特別な地位を与えられているが、母語の地位は全て平等である。

シンガポールの景観の特徴とも言える公営団地もまた、「多人種主義」によってつくられた。1960年、住宅不足とエスニシティ別の住み分けを解消するために、人民行動党は住宅開発庁（HDB）を設立した。HDBは団地建設を進

め、2010年には82.4%がHDBフラットに居住している(Statistics Singapore, 2010)。HDBによる「人種」混住は、他の「人種」と生活空間を共有することでシンガポール人意識を育む目的があった(中村, 2009: 53)しかし、一方でHDBには「人種」別の割り当てがあり、原則的には申し込み順で入居が決定されるが、区画の「人種」の割合は国家と同じになるように調整されている(Chua, 1997: 140-141)。割り当てを越えた場合には、入居や転売が不可能となる。

また、1981年に「人種」の自助団体として、MENDAKI(イスラム教徒子弟教育評議会)が結成されたのを皮切りに、1991年にSINDA(シンガポール・インド人発展支援協会)が結成され、1992年にはCDAC(華人発展支援協会)が結成された(鍋倉, 2011: 56)。政治制度としては、候補者集団³の中にマイノリティ「人種」を少なくとも一人を含むことが必要とされている。このように、「多人種主義」は一方で「シンガポール人」意識を醸成しながら、他方で「人種」を強調し「人種」意識を創出/強化しているのである。

鍋倉は、このような働きをする「多人種主義」への批判点を以下のように述べる。国家権力を一元的に掌握し続けるために、積極的に多元性を強く求めているのではないかという点、そもそも多元性の尊重を唱えるにあたって、多元性の名を借りた一元的支配の強化という国民国家の問題を不問にし、さらにそれを前提としてしまっている点、結局多人種主義は、一元性を再生産しそれを押し付けるだけに終わってしまっている点である(鍋倉, 2006: 41)。具体的には、政府が「人種」的に中立であるとの正統性を保つために、多「人種」状況を維持、強化している点であろう。

さらに、彼は、このような批判だけでなく、「多人種主義」がどのように働いているかのメカニズムを解明するために団地を元に分析した。そして、人種を解体しシンガポール人をつくろうという政策と、人種別の違いを促進する政策との二面性が存在し、これを国家主導で徹底的に行っているのが「多人種主義」であるとし、団地生活でも同様のメカニズムが働いていることを示した(鍋倉, 2006: 52-53)。

1-2 先行研究

「多人種主義」に基づいた政策や効果に関する研究はあるが、国家と人々との関係における「多人種主義」に関する理論的な研究は非常に少ない。Benjaminは、「多人種主義」は多元的社会を構成するとみなされる様々な「人種」の文化やエスニックアイデンティティに平等の地位を与えるイデオロギーであり、同時に、多人種イデオロギーはそのような人々を「人種」という特定の配列に分けるように定義する役割を持つ(Benjamin, 1976: 115)とした。

その後、Brownは時代別に「多人種主義」を分析して、現在の「多人種主義」はエスニックなものが政治的な場に入り込んでいるコーポラティズムとした(Brown, 1994)。また、鍋倉聰は、シンガポールの「多人種主義」は、一元的支配を再生産するための多様性の積極的利用として企業的多文化主義の極例の一つとして位置づけることができるとした(鍋倉, 2006: 41; 2011: 96)。

たしかに「人種」と国家という枠組みで捉えた場合、鍋倉やブラウンの先行研究は正しい。シンガポールの多様性の基礎は「人種」とされていて、「多人種主義」も「人種」を基礎としているからである。しかし、「多人種主義」が「シンガポール人」を創る目的がある以上、政府と「人種」の関係のみに着目するのは不十分ではないか。例えば、「人種」の母語を理解できない人も一定数おり、彼らは「人種」として包摂されていない。また、後述するトバ・バタックのようにアイデンティティの問題や社会的認知の問題が存在する。シンガポールでは、公的には多様性の基礎は「人種」とされているが、そのサブ・カテゴリーであるエスニシティもまた存在しているのである。「シンガポール人」創出には「人種」だけでなく、もちろんエスニシティも対象としなければならない。そのため、エスニシティにも注目して「多人種主義」を論じる必要がある。

2. 「人種」とエスニシティ

2-1 「人種」について

センサスによると、「人種」は以下のように定

義されている。華人は福建や潮州、広東、客家、海南、閩北、福州、興化、上海など中国に出自を持つ人々。マレー人は、ジャワやボヤン、ブギスなどマレーもしくはインドネシアに出自を持つ人々。インド人は、タミルやマラヤーリー、パンジャビ、ベンガル、シンハラなどインド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカに出自を持つ人々。その他は、華人、マレー人、インド人以外の人々で、ユーラシアンやヨーロッパ人、アラブ人、日本人などを含む。シンガポール人と永住者は、CMIOいずれかの「人種」に所属しなければならない。これらの「人種」概念は人々の生活に入り込み、教育言語や住居選択にも影響を与えている。

シンガポールの「人種」分類の始まりは、イギリス植民地時代にさかのぼる。1871年のセンサスでは、28の「人種」とイギリス軍、インド人四人とに分類されている。その後、1881年のセンサスでは、32の分類がされており、さらに「ナショナルリティ」によって6つのグループに分けられた(Hirschman, 1987; Purushotam 1998)⁴。6つのグループとは、ヨーロッパ人とアメリカ人、ユーラシアン、華人、マレー人と半島出身の他の人々、タミル人とインドに出自を持つ他の人々、その他とされていて、ヨーロッパ人とアメリカ人、ユーラシアン以外は、現在のCMIOの基礎となっている。これら6つのグループは、イギリスの世界地図上の6つの分類を反映していた。ヨーロッパとアメリカ、マレー半島と島嶼部、中国本土、インド亜大陸とビルマである(Purushotam, 1998: 63)。そして、1921年に名称が変化し、現在と同じヨーロッパ人、ユーラシアン、華人、マレー人、インド人、その他となった⁵。このように、CMIOは、人類学や民族学的な分類によるものではなく、イギリスの行政上の分類として始まったのである。

例外的にマレー人のほとんどは(方言もあるが)マレー語を話すイスラム教徒だった(Clammer, 1985: 110)ため、意思疎通が可能でマレー人意識を持っていたが、当時の他の「人種」は「人種」としての仲間意識を持っていなかった。華人は出身地別の幫を形成していて、職業や居住地域は出身地別に分かれていた。ほとんどの人々は出身地の方言を使用していた

ため、他の地方の幫の構成員と意思疎通することは不可能であり、ごく一部を除いて交流はなかった(田中, 2002)。インド人は、言語の他にカーストで分かれていて職業も異なっていた(Sandhu, 1993)。

そのため、PAPはシンガポール人としての意識を創出するとともに、「人種」意識を植え付けなければならなかった。まず、前述のように、公用語制定と二言語教育によって、「人種」内の共通語が生まれた。母語クラスでは、エスニシティに関係なく同「人種」の子どもたちが学ぶこととなる。さらに、政府は1979年に華人に母語であるマンダリンを話すように求める運動であるスピーク・マンダリン・キャンペーンを開始する。ついで1981年には方言放送が禁止された。外国の番組は、マンダリンにふきかえて放送される。この運動を通して方言の地位は低下し、2010年には方言を家庭内使用言語とする割合は19.2%となっている。

こうして、政府によって公的には「人種」内の差異は否定され、均質なものとされてきた。創られた「人種」は子どもたちに「事実」として受け継がれている。「人種」とは、カテゴリーによる分類で、イギリス植民地時代に発達し押し付けられ、政府の政策において現在自然化されるようになったものにすぎない(Ang & Stratton, 1995: 76-78)のである。

鍋倉が指摘したように、「人種」の創出はネイションと同じメカニズムが働いている(鍋倉, 1997: 151)。アンダーソンが想像の共同体と呼んだ対象は国家だった(Anderson, 1983)が、シンガポールでは国家のみならず「人種」もまた想像の共同体だと言えよう。

2-2 エスニシティについて

まずシンガポールのエスニシティについて見てみよう。ここでのエスニシティとは、「人種」の下に存在するサブ・カテゴリーを示し、華人の方言集団やマレー人、インド人の中の民族を含む。1871年のセンサスでは、現在はマレー人とされているブギス人とジャワ人が独立して記載され、ユーラシアンもカテゴリーの一つとされていた。その後、エスニシティの分類は変化していったが、1947年まではユーラシアンは独立したカ

テゴリであった。現在のようなCMIOが確立され、エスニシティが四つの「人種」に組み込まれたのは1957年以降である⁶ (Hirschman, 1987: 571-578)。

前節で述べたように、「人種」化の結果、多くのエスニシティは「人種」に包摂されエスニシティ意識は低下した。しかし、消滅したわけではない。「多人種主義」の中で、エスニシティはいかに存在し、どのように扱われているのか。「人種」のものは異なる要素(言語、宗教、アイデンティティ)を持つトバ・パタック、プラナカン、ユーラシアン、タミル・ムスリムを例にあげる。

①トバ・パタック

トバ・パタックとは、インドネシアからの移民で、キリスト教を信奉する人々である。シンガポールに100人程度しかいないが、HKBP (HURIA KURITSTEN BATAK PROTESTANT) SINGAPOREという民族教会を中心に、独自のコミュニティを作って生活している。建築物としての教会は持っておらず、タミル・メソジスト教会に間借りして、週に一回の礼拝を行ったり会議を開いている。新しくシンガポールを訪れた人々は、この場で紹介され、礼拝後の懇親会で交流を深める。2009年8月に現地調査を行ったところ、彼らはパタック語もしくはインドネシア語、英語で話すが、シンガポール生まれの子どもたちは英語を喋っていた。そのため、礼拝や聖書はインドネシア語が使用され、教会の案内や礼拝当日のプログラムにはインドネシア語と英語が併記されている。

シンガポールのマレー人の分類に従うと、インドネシア出身の彼らの「人種」はマレー人である。IDカードに記載されている「人種」は統一されておらず、マレー人もいればその他もいる。しかし、シンガポールでは、トバ・パタックという存在を認識している人はほとんどいないため、シンガポールにおいてトバ・パタックのアイデンティティを主張するのは難しい。2009年に行ったインタビューでは、あるトバ・パタックの女性は「シンガポールで自分たちのエスニシティを説明するのは難しい。」「自分たちは、インドネシア人でもないし、マレー人でもないし、華人でもないし、トバ・パタックだ。」と自分たちのアイデ

ンティティについて説明した。

彼らがマレー人という「人種」を拒否する背景には、キリスト教徒としてのアイデンティティとシンガポールでのマレー人の一般的なイメージがある。トバ・パタックは、キリスト教徒としての意識が強く、モスクへの寄付について「額は小さいが、ムスリムではないので寄付はしたくない。」と主張する。また、マレー人の怠惰で向上心が無いといったイメージはシンガポールでは否定的な意味合いを持つ(斉藤, 2003: 21-33)。このため、トバ・パタックにマレー人としてのアイデンティティを意識させながらも、拒否させ、独自のエスニシティを求めさせるのである(斉藤, 2003: 22)。

また、斉藤は移民一世の中にはシンガポールで「人種」を問われた際にマレー人と答えることを拒否し、インドネシア人というナショナリティをエスニシティの代替として答える例も指摘している(斉藤, 2003: 21-33)。しかし、この指摘とは異なり、2009年の時点ではシンガポール国籍を持つトバ・パタックの多くは、シンガポール人としての意識を持っている。

②ユーラシアン

ユーラシアンとはヨーロッパ人と現地住民の混血の人々の子孫である民族である。現在のユーラシアンの先祖は、ポルトガルなどのヨーロッパ人を父親に持ち、インド人やマレー人、華人を母親に持つ人々だった。そのため、統一された文化を持たず「人種」的には不均一な人々である。東洋と西洋両方の伝統と習慣の結合を豊富に受け継ぎ、ほとんどは人生に不可欠な部分であり宗教的な式典(celebration)を持つキリスト教徒である。中にはアジア人よりの見た目をしている人もいるが、ヨーロッパ人の先祖との主要なつながりは、その苗字である。彼らには歴史的には優遇された時代もあったが、現代のシンガポール社会においては「多人種主義」のその他の「人種」に分類されている。彼らは、90年代に小説でのユーラシアンの書かれ方に反感を持ち、再びユーラシアンとしての意識を持ち始めた。この動きに呼応して、シンガポール政府はユーラシアンをサポートすることになる(Pereira, 2006: 20)。これらの動きを通してユーラシアンが求めたもの

は、政治的経済的な利益よりも不可視なエスニシティでなくなったことの社会的な利益であった (Pereira, 2006 : 24)。

ユーラシアンは、統一された文化をもたないものの、エスニック集団としての意識を持ち現在では、ユーラシアン協会を中心に、自身のアイデンティティとエスニック集団としての存在を主張している。

ユーラシアン協会とは、1919年に設立され、1994年に自助組織となった団体である。現在の会員数⁸は3046人 (the Eurasian Association Annual Report 2009) で、自助組織としての役割の他に、クリスマスパーティやスポーツクラブなどを通して会員のコミュニケーションを促進し、団結をはかっている。

ユーラシアン協会の使命として、1、統合された団結して力強いユーラシアンコミュニティの遺産を豊かにすること。2、多エスニックで、多宗教で、多文化なシンガポールに貢献することを上げている (the Eurasian Association)。

ここで着目すべきは「多エスニック (multi-ethnic)」という語を使用していることである。シンガポールでは、「人種」をエスニック集団とみなしているため、ほとんどの場合、多「人種」 (multiracial) という語が使用される。しかし、ユーラシアン協会では、このようにエスニックという語を使用し、その他という「人種」よりも、自分たちのエスニシティとしてのアイデンティティを強調しているのである。

③プラナカン

プラナカンとは、もともとマレー語の anak (子ども) に由来し、現地で産まれたマレー人と非マレー人の子孫を示す。ゆえに、華人とマレー人の混血だけでなく、インド人とマレー人との混血を示すチッター・プラナカンやジャウィ・プラナカンも存在する (Hardwick, 2008 : 38 ; Mani, 1992 : 339)。しかし、現在ではプラナカンとは「少なくとも17世紀から列島に定住した初期の華人コミュニティの子孫」 (the peranakan association) とされ、華人性が強調されている。このような初期の華人は非イスラム教徒の女性と結婚したため、マレーと中国の両方の文化を持つ民族であるとされている。特に、ペラナカンの男性のことを

パバと呼び、女性をニョニヤと呼ぶ。彼らは、パバ・マレーと呼ばれるマレー語と福建語の合わさった言語を話し、マレー風の衣装をまといながらも、イスラムではなく道教や仏教など中国の宗教を信奉する。

彼らのアイデンティティは、時代によって変化してきた。イギリス植民地支配のもとでは、プラナカンアイデンティティは新しくて貧しい華人移民と定着した東南アジア華人を区別する手段となった。また、このプラナカンアイデンティティは、裕福で洗練されていて英語教育を受けた植民地の仲買人としての力を持つ人と関わっていた。しかし、その後、ペラナカンの家庭生活の側面が記念にされ、美化されるにつれ、自らをプラナカンとする人々は、マジョリティの華人の中に同化することが推奨された (Hardwick, 2008 : 51)。

現在ではプラナカンは華人カテゴリーの中に組み込まれ、母語もマンダリンとされている。そのために、プラナカンの独特な特徴は価値を減じられ、彼らのアイデンティティの感覚は弱まっている (Henderson, 2003 : 36)。

とはいえ、現在、プラナカン協会が存在するので、エスニシティとしてのプラナカンは存在していることがわかる。

④タミル・ムスリム

シンガポールのインド人の宗教は、ヒンドゥ教だとされている。しかし、センサスによると、ヒンドゥ教徒は58.9%にすぎず、イスラム教徒が21.7%となっている。その内訳は、ボーホラー・ムスリム、ウルドゥ語を話すムスリム (パキスタン人など)、ベンガル・ムスリム、マラヤーリー・ムスリム、そしてタミル・ムスリムがいる。ここでは、多数派のタミル・ムスリムを例にあげる。

タミルは、インド人の中でも多数派で、タミル語は公用語としての地位を得ている。ヒンドゥ・タミルとタミル・ムスリムはどちらもタミル語を母語とする。タミル人の中では、分裂や敵対は無く、両者は私的な組織で交流している。多くのタミル・ムスリムのリーダーたちは、タミル全体のコミュニティでもリーダーシップを発揮し、全ての自助コミュニティは宗教ではなくタミル語を類似性の基礎としている (Mani, 1992 : 352)。

しかし、宗教に関しては、微妙な立場にある。シンガポールでは、ムスリムであることはマレー人であることと切り離せないが、一方でタミル・ムスリムはマレー人アイデンティティの中には入り込むことができない。1991年に設立されたMENDAKI（イスラム教徒子弟評議会）は、設立当初はイスラム教徒を対象としていたが、現在ではほとんどマレー人を対象とした組織に変化している（鍋倉，2011：55）。そのため、言語的にはインド人ではあるが、宗教的には「マレー人」である彼らは、「人種」の強化の中では微妙な立場に置かれているのである。

また、「人種」間通婚の少ないシンガポールで、タミル・ムスリムはマレー人と結婚することに違和感や嫌悪感を持っておらず、その結果、「インド人（南アジア系）」という概念・アイデンティティが希薄化しつつある（三宅，2000：69）。

このように「人種」のイメージと合致するエスニシティ（華人の方言集団など）は、「人種」に包摂されてきたが、完全に包摂されていないエスニシティも存在する。彼らは「人種」として扱われ、（ユーラシアン以外は）エスニシティとしてのアイデンティティを公的に認められてはいない。また、彼ら自身も与えられた「人種」に対する違和感とエスニシティ意識とを持っているのである。

3. 「多人種主義」考察

3-1 公的空間と私的空間

前章までの議論で、シンガポールにおける「人種」が創られた概念であること、「人種」の他にエスニシティが存在することが明らかになった。では、この二つはどのような関係にあるのか。

シンガポールにおける「多人種主義」の中では、人々が「人種」として存在する場とエスニシティとして存在する場は異なる。この使い分けの区別を理解するために、公的空間と私的空間という概念を使用する。

まず、公的空間と私的空間についてまとめよう。アレントは、古代ギリシア以来の空間概念を公的空間と私的空間に分けている。公的空間と

は、古代ギリシアのポリスのような、万人によって見られ、聞かれ、可能な限り最も広く公示される、平等なものによる政治活動の場であるとしている。また、社会的空間⁹に関しては、一定の共同体の成員を全て平等にかつ平等の力で抱擁し、統制するに至っているとした。公的舞台では、それに適切であると考えられるもの、見られ、聞かれる価値があると考えられるものだけ許され、したがってそれに不適切なものは自動的に私的な事柄となるとしている。

一方で私的空間とは、古代ギリシアの家族に始まるもので、私的という意味は、他人によって見られ聞かれることから生じるリアリティを奪われていること、物の共通世界に介在によって他人と結び付き分離されていることから生じる他人との「客観的」関係を奪われていること、さらに、生命そのものよりも永続的なものを達成する可能性を奪われていることを意味するとしている（Arendt, 1958）。

これに基づいて、シンガポールの公的空間と私的空間について明らかにしていこう。シンガポールでの複数の空間の概念自体は、Clammerによって既に指摘されている（Clammer, 1998：67）¹⁰。しかし、実際は、彼の区別は公的空間内での区別でしかない。なぜなら、彼はここでのマイノリティを「人種」としているの、この区別にエスニシティ概念を組み込んでいないからである。彼の区別は、さらなる発展の余地がある。以下、エスニシティ概念を組み込んだ空間の区別をする。

まず、シンガポールの公的空間とは、学校、住居、IDカードを必要とする場、そして選挙などの政治的な場を意味する。ここでは、人々はシンガポール人として存在するのみならず、「人種」として存在することに注目しなければならない。なぜなら、公的空間では、シンガポール人という概念は単なる前提となり、「人種」であることが強調されるからである。「人種」ごとに決定された母語で教育を受け、「人種」別割り当てによって住まいが決定され、IDカードに記載された「人種」は常に人々をラベリングする。公的空間における多様性は、先行研究にも見られるもので、シンガポールを訪れただけでも容易に観察できる。多言語使用や、多言語教育、祝日¹¹の制

定、文化の尊重である。

一方の私的空間とは、政治と無関係な場である家庭、個人的な友人・知人との関係、同じエスニシティとの人々との関わりの中である。ここでは、個人であり、エスニシティの一員として存在できる。私的空間における多様性は、公的空間では表されないために観察されにくい。家庭での方言使用などエスニシティ言語の使用、宗教、家々の飾りつけ、名前、習慣である。ここには、政治的な力は加わらない。

以上より、シンガポールの「多人種主義」は、シンガポール人としての公的空間1、「人種」としての公的空間2、エスニシティとしての私的空間の三つが存在する。鍋倉は、三層のアイデンティティの存在を指摘しているが（鍋倉、2011）、それがあらわれる空間もまた三層構造となっているのである。

これらの空間概念を用いてシンガポール社会を図式化した場合、図のようになる。公的空間1は、人々が常にシンガポール人として存在する場であり、その意識は「人種」意識やエスニシティの意識に先行する。公的空間1が公的空間2と私的空間を包摂していると言えよう。もちろん、全ての空間に影響し、シンガポール人としての意識は「人種」やエスニシティに先行する。公的空間2は、人々が「人種」として存在する場を表す。そして、私的空間では人々はエスニシティとして存在する。図の私的空間における○はエスニシティを表し、破線は「人種」概念では収まらない人々

がいることを示す。

それぞれの空間におけるアイデンティティは、公的空間1（そして公的空間2、私的空間）ではシンガポール人として、公的空間2では「人種」として、私的空間ではエスニシティとしてのものである。この階層を上から下の方へ越えることは可能だが、逆は不可能である。つまり、シンガポール人意識を前面に出した華人やその他としての意識を前面に出したユーラシアンは存在できるが、逆にシンガポール人である前に華人であると主張することや、その他である前にユーラシアンであると主張することは許されていない。

3-2 コーポレイト多元主義とリベラル多元主義

では、それぞれの空間の関係はどのようなものか。以上の公的空間と私的空間の区別は、「多人種主義」による「人種」の強化によって人々がアイデンティティを使い分けた結果、形成されたものである。先行研究では、シンガポールの公的空間のみを扱ってきた。その結果、鍋倉のように、「多人種主義」がコーポレイト型多文化主義とされてきたのである。しかし、前節までで指摘したように、エスニシティのアイデンティティが現れる私的空間が存在する。そのため、「多人種主義」が国民統合に関わるメカニズムを解明するには、3つの空間の関係を分析する必要がある。ここでは、多様な人々の共存を可能にする役割を持つ多文化主義の理論を用いて分析する。

まず、多文化主義の理論についてまとめておこう。Gordonは、多文化主義をその特徴に基づいて二つに分類した。一つは、コーポレイト多元主義で、もう一つはリベラル多元主義である（Gordon, 1988）。Gordonの議論を受けた関根の整理によると、コーポレイト多元主義とは以下の通りである。多文化の尊重と異文化の人々の不利を克服するため、公的生活領域でも多言語放送、多言語コミュニケーション文書、多言語・多文化教育が行われる。エスニック・コミュニティ言語、文化の維持も政府が援助するため、文化・言語の永続的存続は確実に保証される。そして、エスニック・コミュニティは政府援助の対象となり、法人格を与えられる。普遍主義的な市民社会の価値・規範や基本的人権は守られるべきだとす

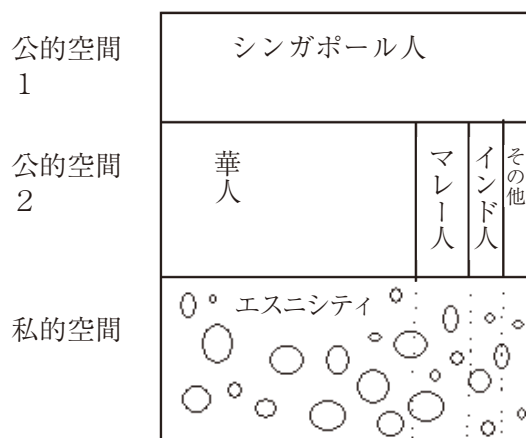


図1

るのが普通であるが、エスニック・コミュニティの人々の不利益状況を少しでも緩和するため、私的、公的領域を問わず多言語を認めると同時に、伝統的習慣や規範の並存もある程度容認しようとする（Gordon, 1988；関根, 1996：47-48）。

一方、リベラル多元主義は、社会統合に際し文化的多様性を許容し、エスニック集団、民族の存在も認めるが、市民生活や公的生活面ではホスト社会の文化、言語、社会習慣に従うべきだとする。つまり、公的空間と私的空間を明確に分け、私的領域での文化的多様性は認めるが、公的生活領域では認めないとするもので、同化主義との違いも少ない。多文化主義をいずれは文化融合社会へもっていくまでの一時的、過渡的な政策として政府が考えている場合もあり、多文化状況を永続的なものとみる意識が薄いこともありうる（関根, 1996：45-46）。

3-3 コーポレート多元主義、リベラル多元主義としての「多人種主義」

では、空間ごとに分析していきたい。まず、公的空間1と公的空間2の関係である。「人種」の母語を公用語に制定したり、二言語教育の実施、「人種」ごとの自助組織への援助、指導者による多文化国家だとの公式見解などシンガポール政府は多様性を公的空間においても認めている。確かに、民族政党が許されていないことやアフーマティブ・アクションが行われないことなど、多少の例外はある。しかし、文化の承認に関して言えば、公的空間1と2の関係での「多人種主義」は、鍋倉の指摘したように（鍋倉, 2006：41）、コーポレート型多元主義と言うことが可能である。

次に、私的空間と公的空間2との関係はいかなるものなのか。「人種」がナショナルリティと同様のメカニズムで形成されていることを考慮すると、エスニシティと「人種」の関係も、多文化主義理論を使用して分析することが可能である。まず、シンガポールの人々は公的な場では第一に「人種」であることが求められる。「人種」の言語を使用し、「人種」の文化を持ち、「人種」の社会習慣になじみ、「人種」アイデンティティを持つことが要求されるのである。一方、家庭内などの私的空間や宗教施設などで、エスニシティの言語を使用し、その文化を持ち、エスニシティとして

のアイデンティティを表現する。私的空間での表現に政府が介入することはない。一方で、政府は、マイノリティをマレー人、インド人、その他という「人種」として理解しているので、エスニシティの文化に公的な保護を与えることはほとんど無く、文化の継承はエスニシティの成員に任せられる。

スピークマンダリンキャンペーンに際し、リーは「私たちは、ある場合には方言が家庭内使用言語でありつづけることを認めなければならない」と述べた（Speech by prime minister Lee Kuan Yew：1984）。この発言は、政府が家庭内の言語使用に干渉しないことを示している。以上より、シンガポールの公的空間2と私的空間の関係はリベラル多元主義だと言えるだろう。

おわりに

従来のシンガポールの「多人種主義」に関する研究は、公的空間1と公的空間2の関係のみを扱ってきた。しかし、私的空間とエスニシティの観点を加えて分析することで、「多人種主義」は三層構造で二つのメカニズムを持つことが明らかになった。

この構造は国民統合にどのように関わっているのか。一つの答えは、公的空間1の保護である。多様性の承認やアイデンティティの問題を公的空間2と私的空間に閉じ込め、公的空間1に入り込まないようにしている。すなわち、大きな差異であるCMIOはあらかじめ承認し、その多様性に基づいた国民統合を推進するが（公的空間内の関係）、小さな差異であるエスニシティは大きな差異（「人種」）の中に組み込み、差異の問題を公的空間2と私的空間での関係の中だけのものとしているのである。実際、トバ・パタックのアイデンティティのように、リベラル多元主義特有の問題も存在するが、それは公的空間2と私的空間の問題とされ、公的空間1には関わっていない。「多人種主義」は多様性を複雑で巧妙な手段で承認しているのである。

このような側面に着目すると、「多人種主義」は多文化主義とリベラリズム（または、コーポレ

イト多元主義とリベラル多元主義)の対立を越えたものとしての理解が可能である。リベラリズムに対する批判として、公的空間と私的空間の区別に収まらない問題があげられる。例えば、フランスでのスカーフ問題や食事の問題があげられる。ムスリムにとって、これらは私的空間に収まるものではなく、個人のアイデンティティとして公的空間にも入り込む。ここに、リベラリズムの論理と個人のアイデンティティや権利との対立が生じる。また、公的空間と私的空間の範囲をどのように決定するかという問題も生じる(梶田, 1996: 84) 一方、コーポレイト多元主義などの多文化主義に対しては、どの程度まで差異を認めるかという問題を孕んでいる。

これらの問題に対して、シンガポールの「多人種主義」は一つの可能性を示している。公的空間と私的空間を区別するが、公的空間2に入り込む多様性についてはコーポレイト型多元主義として承認する。一方でリベラリズムの論理も同時に使用して、多様性を制限し差異の範囲をあらかじめ決定するのである。華人の方言集団やインド人エスニシティ、マレー人エスニシティなどほとんどのエスニシティはこの方法で包摂されてきたのである。このモデルは、リベラル多元主義かコーポレイト多元主義かの二元論を越える可能性を秘めている。

とはいえ、もちろん「多人種主義」は万能ではない。エスニシティの公的空間での承認の問題や、CMIOの分類に収まらない人々をどのように扱っていくか、移民を受け入れるに当たってその他のカテゴリを広げるのか、また永住者のエスニシティをどのように扱うかが「多人種主義」の今後の課題となろう。グローバル化の中では、「人種」枠組みを使用した国民統合は限界を迎えつつある。だとすると、「多人種主義」それ自体の見直しも必要となると考えられる。

[注]

- 1 シンガポールでは、国家を構成する4つのエスニックな集団(華人、マレー人、インド人、その他)をraceと呼ぶ。これは、イギリス植民地時代に使用されていた人々の集団を表す用語である。この語を種族を訳す場合もあるが、raceという語の本来の意味や形成された当時の意識も踏まえて、人種と訳す。生物学的な人種と区別

するために「」を使用する。

- 2 エスニシティについては多くの研究者によって研究されてきた(Naroll: 1964; Barth: 1969 = 1996; Shils: 1957; Geertz, 1963; Cohen, 1974; Sollors, 1989; Smith, 1989; 鍋倉, 1996 = 2011; 塩川, 2008)。そのため、研究者によって定義もさまざまである。本論文では、エスニシティを「血縁ないし先祖・言語・宗教・生活習慣・文化などに関して、『われわれは〇〇を共有する仲間だ』という意識が広がっている集団」(塩川, 2008: 3-6)であり、その特徴が外から観察できる集団とする。ゆえに、シンガポールでは、華人方言集団やプラナカン、ブギスやバタックなどマレー人の部族、タミルなどインド人の部族、その他に含まれるユーラシアンなどを意味する。また、同じ部族内でも宗教や習慣が異なる場合は、その集団を別のエスニシティとする。
- 3 シンガポールでは、グループ代表選挙区が導入されている。これは、従来の小選挙区を複数集めて一つの選挙区とし、数人の候補者が一つのチームをつくって、チーム対抗の選挙を行い、一番得票率の多いチーム全員が当選するという制度である(鍋倉, 2011: 56)。
- 4 Purushotamは1881年のセンサスでの分類を47としているが、Hirschmanの表によると32である。また、Purushotamは6つのグループへの分類を1881年としているが、Hirschmanの表では1891年となっている(Hirschman 1987: 571; Purushotam 1998: 61-62)。
- 5 ここでもHirschmanの表とPurushotamは異なる。Purushotamは1921年とするが、Hirschmanの表では1911年である。
- 6 とはいえ、1957年の段階では、分類の内容は現在と少し異なる。例えば、現在はインド人とされるパキスタン出身の人々やセイロン・タミル、他のセイロン出身の人々はその他のカテゴリに分類されていた。
- 7 2009年8月のインタビューより。
- 8 Life Members, Ordinary Members, Associate Members, Associate Ordinary Members, Junior Membersの合計会員数。
- 9 厳密には、アレントは、公的空間と社会的空間を分けている。公的空間は競争の空間でもあったのに対し、社会的空間は平等の空間であった。しかし、現在は公的空間と社会的空間の区別があいまいになっていること、また、シンガポールでは社会は政治と深く関わり、社会的空間と政治的な公的空間の区別がほとんど見られないことから、本論文では私的空間との対比の意味で、社会的空間と公的空間を合わせて公的空間とする。
- 10 Clammerの議論では、シンガポール社会はコーポレイト型多元主義よりもむしろリベラル多元主義に近いかもしれない。しかし、シンガポール社会での「人種」の多様性の扱われ方を見ると、コーポレイト型である。しかしながら、この点について議論を進めることは、本論文の趣旨とは異なる。ここでは、空間の区別というアイデアを提示したことだけを示すために引用した。

- 11 シンガポールでは、イスラム教、キリスト教、ヒンドゥー教のそれぞれの祝日を国家の祝日としている。祝日は以下の通りである。中国旧正月、イースター、釈迦誕生祭（仏教）、ハリ・ラヤ・プアサ（ラマダン明けの祝日）、ディーパバリ（ヒンドゥー教の光の祭典）、ハリ・ラヤ・ハジ（メッカ巡礼祭）、クリスマス。

【参考文献】

- 綾部恒雄（1996）『国家のなかの民族—東南アジアのエスニシティ』明石書店
- 奥村みさ（2009）『文化資本としてのエスニシティ シンガポールにおける文化的アイデンティティの模索』国際書院
- 黄淋華、呉俊剛編 田中恭子訳（1988）『シンガポールの政治哲学—リー・クアンユー首相演説集（上）』井村文化事業社
- （1988）『シンガポールの政治哲学—リー・クアンユー首相演説集（下）』井村文化事業社
- 塩川伸明（2008）『民族とネーション—ナショナリズムという難問』岩波新書
- 関根正美（2000）『多文化主義社会の到来』朝日選書
- 田中恭子（2002）『国家と移民』名古屋大学出版会
- 田村慶子（2000）『シンガポールの国家建設 ナショナリズム、エスニシティ、ジェンダー』明石書店
- 中村都（2009）『シンガポールにおける国民統合』法律文化者
- 鍋倉聡（2011）『シンガポール「多人種主義」の社会学 団地社会のエスニシティ』世界思想社
- R = ドウブレ、樋口陽一、三浦信孝、水林章（2006）『思想としての＜共和国＞日本のデモクラシーのために』みすず書房
- Anderson, B (1983). *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London: Verso =（白石隆、白石さや訳（1997）『想像の共同体』NTT出版）
- Arendt, Hannah (1958) *The Human Condition*, Chicago: University of Chicago Press（=志水速雄 訳（1994）『人間の条件』筑摩書房）
- Banton, Micheal P. (1998) *Racial Consiouness*, New York: Longman.
- Chew Sock Foon (1987) *Ethnicity and nationality in Singapore*, Athens: Ohio University.
- Brown, David, (1994) *The State and Ethnic politics in Southeast Asia*, London & New York: Routledge.
- Chew Sock Foon (1987) *Ethnicity and Nationality in Singapore*, Center for International Studies Ohio University
- Clammer, John (1979) *The ambiguity of identity: ethnicity maintenance and change among the Straits Chinese community of Malaysia and Singapore*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies
- （1985）*Singapore: Ideology, Society and Culture*, Singapore: Chopmen
- （1998）*Race and state in independent Singapore 1965-1990: the cultural politics of pluralism in a multiethnic society* Aldershot: Ashgate publishing Ltd
- Furnivall, J.S. (1956) *Colonial Policy and Practice*, New York: New York University Press.
- Geertz, Clifford (1963) *The Interpretation of Cultures*, New York: Basic Books.（=吉田禎吾他訳（1987）『統合的革命』『文化の解釈学』岩波書店）
- Goh, Keng Swee (1979), *Report on the Ministry of Education*, Singapore Ministry of Education.
- Gordon, M. M. (1998) *The Scope of Sociology*, New York: Oxford University press
- Hill, Michael & Lian, Kwen Fee, (1995) *The Politics of Nation Building and Citizenship in Singapore*, London: Routledge.
- Kimlicka, will. (1995) *Multicultural citizenship A Lliberal Theory of Minority Rights*, New York: Oxford University Press =（角田猛之、石山文彦、山崎康仕訳（1998）『多文化時代の市民権—マイノリティの権利と自由主義—』晃洋書房）
- Lee, Edwin, (1991) *British as rulers: Governing Multiracial Singapore 1867-1917* Singapore: Singapore University Press.
- （2008）*Singapore: The Unexpected Nation* Singapore: ISEAS Publishing
- Lee, Kuan Yew, (1998) *The Singapore Story: Memories of Lee Kuan Yew*, Singapore: Times Editions =（小牧利寿訳（2000）『リー＝クアンユー回顧録—ザ・シンガポール・ストーリー 上』日本経済新聞社）
- （2000）*From Third to First: The Singapore Story 1965-2000 Memoirs of Lee Kuan Yew*, Singapore: Times Editions and Singapore Press Holdings =（小牧利寿訳（2000）『リー＝クアンユー回顧録—ザ・シンガポール・ストーリー 下』日本経済新聞社）
- Mauzy, Diane K. and Mine, (2002) R. S., *Singapore Politics Under the People's Action party* London: Routledge
- Milne, R.S. (1981) *POILITICS IN ETHNICALLY BIPOLAR STATE* Canada: The University of British Columbia
- Rich, P.B., (1986=1990) *Race and Empire in British Politics*, Cambridge, Great Britain: The Cambridge University Press.
- Smith.A.D, (1986) *The Ethnic Origins of Nations*, Basil Blackwell, Oxford =（栗山 靖司 他訳（1999）『ネーションとエスニシティ—歴史社会学的考察』名古屋大学出版会）
- Taylor, Charles, (1994), *Multiculturalism: Examining the*

- Politics of Recognition*, Princeton University Press = (佐々木毅、辻康雄、向山恭一訳 (1996)『マルチカルチュラリズム』岩波書店)
- Tay, Mary Wan Joo (1993) *The English Language in Singapore: Issues and Development*, Singapore: National University Singapore Press.
- Tong, Chee Kiong (2010) *Identity and Ethnic Relations in Southeast Asia racializing Chineseness*, New York: Springer
- Vasil, Raj (1995) *Asianising Singapore The PAP's Management of Ethnicity* Singapore: Heineman Asia Singapore.
- 岡部達味 (1984)「シンガポールの二言語政策」土屋健治、白石隆 編、『東南アジアの政治と文化』東京大学出版会
- 梶田孝道 (1996)『『多文化主義』をめぐる論争点一概念の明確化のために』初瀬龍平編『エスニシティと多文化主義』同文館 67-101頁
- 齋藤千恵 (2003)「ナショナルリティとエスニシティーシンガポールのトバ・バタック人キリスト教徒アイデンティティ」『南方文化』30号 天理南方文化研究会 21-44頁
- 関根政美 (1996)「国民国家と多文化主義」初瀬龍平編『エスニシティと多文化主義』同文館 41-66頁
- 都丸潤子 (1999)「発展途上国における多文化主義」『国際協力論集』第7巻 第2号 神戸大学国際協力研究科 117-130頁
- 鍋倉聰 (1997)「多文化主義におけるエスニシティの編成」『京都社会学年報』第五号 京都大学 151-170頁
- (2006)「シンガポールにおける『多人種主義』の実践—団地政策にみる人種編成のメカニズム」『ソシオロジ』50 (3) 社会学研究会 pp. 39-55
- 橋本和孝 (2006)「社会工学としてのコミュニティ形成—シンガポールのケース—」『ヘスティアとクリオ』Vol. 4 51-62頁。
- 三宅博之 (2000)「シンガポールの『南アジア系』移民」古賀正則、内藤雅雄、浜口恒夫編『移民から市民へ—世界のインド人コミュニティ—』東京大学出版会 56-71頁。
- Ang, Ien & Stratton, Jon (1995) "The Singapore way of Multiculturalism: Western Concepts/Asian Cultures", *Sojourn*, 10:1, pp. 65-89.
- Barth, Fredrick (1968) "Introduction", Barth (ed.) *Ethnic Groups and Boundaries: the Social Organization of Culture Difference*,
- Benjamin, Geoffrey (1976) "The Cultural Logic of Singapore's 'Multiracialism'" Hassan, Riaz (ed.), *Singapore: Society in Transition* Kuala Lumpur Oxford University Press pp. 115-133.
- Bokhorst-Heng, 2007 'Multiculturalism's narratives in Singapore and Canada: exploring a model for comparative multiculturalism and multicultural education' *Journal of Curriculum Studies*, 39:6 pp. 629-658
- Bokhorst-Heng, Wendy D. and Caleon, Imelda Santos, 2009 'The language attitudes of bilingual youth in multilingual Singapore' *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 30:3 pp. 235-251
- Brown, David, (1997) 'The politics of Reconstructing National Identity: A Corporatist Approach' *Australian Journal of political Science* 32:2, pp. 255-270
- Chan, Heng-Chee & Evers, Hans-Dieter (1978) "National Identity and Nation Building in Singapore", Chen, Peter S.J. & Evers, Hans-Dieter (eds.) *Studies in Asian Sociology: Urban Society and Social Change*, Chopmen Enterprises.
- Christopher, A.J (2005) "Race and the census in commonwealth" population, *Space and Place* 11:2, pp. 103-118.
- Chua Beng Huat (1994) "Arrested development: democratization in Singapore" *Third World Quarterly* 15:4, pp. 655-668.
- Chua Beng Huat (1998a) "Culture, Multiracialism, and National Identity in Singapore" in Kuan-hsing Chen eds. *Trajectories Inter-Asia Cultural Studies* by Routledge in London and New York pp. 186-205
- Chua, Beng Huat (1998b) "Racial Singaporeans-Absence after the hyphen", Kahn, J.S.(ed) *Southeast Asian Identities: Culture and the Politics of Representation in Indonesia, Malaysia, Singapore, and Thailand*. Institute of Southeast Asian Studies: Singapore. pp. 28-50.
- Chua Beng Huat (1998c) "Asian values: Restraining the logic of capitalism?", *Social Semiotics*, 8:2, pp. 215-226.
- Chua, Beng Huat, (2003) 'Multiculturalism in Singapore: An Instrument of Social Control' *Race & Class* 44 pp. 58-77
- Chun, Allen (1996) "Discourse of Identity in the Changing Spaces of Public Culture in Taiwan, Hong kong and Singapore" *Theory, Culture and Society* Vol. 13 pp. 51-75.
- Cohen, Abner, (1974=2004) "Introduction: The Lesson of Ethnicity" Cohen, Abner (ed.) *Urban Ethnicity*, London: Tavistock Publications pp. ix-xxiv
- De souza, Dudley, (1980), "The politics of Language: language Planning in Singapore", Evangelos, A. Afendras and Kuo, Eddie C.Y., (eds.), *Language and Society in Singapore*. Singapore: Singapore University Press.
- Fee, Lian Kwen (2001) "The construction of Malay identity

- across nations Malaysia, Singapore, and Indonesia" *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 157:4 pp. 861–879.
- Goponathan, Saravanan, (1976), "Towards A national Educational System", Hassan, Riaz (ed.), *Singapore: Society in Transition* Kuala Lumpur Oxford University Press pp. 67–83
- Hardwick, Patricia Ann. (2008) "Neither Fish nor Fowl": Constructing Peranakan Identity in Colonial and Post-Colonial Singapore" *Folklore Forum* 38:1 pp. 36–55.
- Henderson, J. (2003) "Ethnic Heritage as a Tourist Attraction: the Peranakans of Singapore" *International Journal of Heritage Studies* 9:1 pp. 27–44.
- Hirschman, Charles (1986) "The making of race in colonial Malaya: Political economy and racial ideology" *Sociological Forum* Vol. 1. No. 2:330–361.
- (1987) "The meaning and measurement of Ethnicity in Malaysia: an analysis of census classifications". *J Asian Stud* 46:555–582
- Ismail, Rahil & Shaw, Brian J. (2006) "Singapore's Malay-Muslim Minority: Social Identification in a Post '9/11' World" *Asian Ethnicity*, 7:1, pp. 37–51.
- Lam, Theodora and Yeoh, Brenda S.A. (2004) "Negotiating 'home' and 'national identity': Chinese-Malaysian transmigrants in Singapore" *Asia Pacific Viewpoint*, Vol. 45, No. 2 pp. 141–164
- Kawasaki, Kenichi (2004) "Cultural hegemony of Singapore among ASEAN Countries: Globalization and Cultural Policy" *International journal of Japanese Sociology* 13 pp. 22–35.
- Kong, Lily and Yeoh, Brenda S. A. (1997) "The construction of national identity through the production of ritual and spectacle An analysis of National Day parades in Singapore" *Political Geography* 16; 3 pp. 213–239.
- Lee, Sharon Mengchee (1988) "Intermarriage and Ethnic Relations in Singapore" *Journal of marriage and the family* 50 February pp. 255–265
- Lim, C. L. (2004) "Race, Multi-Cultural Accommodation and the Constitutions of Singapore and Malaysia" *Singapore Journal of Legal Studies* pp. 117–149.
- Liu, James H., Lawrence, Belinda, Ward, Colleen and Abraham, Sheela (2002) "Social representations of history in Malaysia and Singapore: On the relationship between national and ethnic identity" *Asian Journal of Social Psychology* 5 pp. 3–20.
- Mani, A. "Aspects of identity and change among Tamil Muslim in Singapore", *Journal of Muslim Minority Affairs* 13:2 pp. 337–357.
- Means, Gordon P. (1996) "Soft Authoritarianism in Malaysia and Singapore" *Journal of Democracy*, 7:4, pp. 103–117.
- Naroll, Raoul (1964) "On Ethnic unit Classification" *Current Anthropology* 5:4 pp. 283–312.
- Nagel, Joane (1994) "Constructing Ethnicity: Creating and Recreating Ethnic Identity and Culture" *Social Problems* 41:1 pp. 152–176
- Nkonko M. kamwangamalu (2007) "One language, multi-layered identities: English in a society in transition, South Africa" *World Englishes*, Vol. 26, No. 3, pp. 263–275.
- Purushotam, Nirmala (1988) "Disciplining Difference-Race in Singapore" Kahn, J.S. (ed) *Southeast Asian Identities: Culture and the Politics of Representation in Indonesia, Malaysia, Singapore, and Thailand*. Institute of Southeast Asian Studies: Singapore. pp. 51–94.
- Pereira, A.A., (2006) "No longer 'other': the emergence of the eurasian" Lian Kwen Fee (ed.) *Race, Ethnicity, and the State in Malaysia and Singapore* Brill
- Ramraj, Victor V. (2003) "The Post-September 11 Fallout in Singapore and Malaysia: Prospects for an Accommodative Liberalism" *Singapore Journal of Legal Studies* pp. 459–482.
- Shils, Edward (1957) "Primordial, Personal, Sacred and Civil Ties" *British Journal of Sociology* 8:2 pp. 130–145.
- Sollors, Werner (1989) "Introduction: The Invention of Ethnicity" Sollors Werner (ed.) *The Invention of Ethnicity*, New York: Oxford University Press pp. ix–xx
- Thio, Li-Ann (2006) "Control, Co-optation and Co-Operation: Managing Religious Harmony in Singapore's Multi-Ethnic, Quasi-Secular State" *Hastings Constitutional Law Quarterly* Vol. 33:2 & 3, pp. 197–254.
- Wee, C.J.W.-L. (2000) "Capitalism and ethnicity: creating 'local' culture in Singapore" *Inter-Asia Cultural Studies*, Vol. 1. No. 1 pp. 129–143.
- Zakaria, Freed (1994) "Culture Is Destiny A Conversation with Lee Kuan Yew" *Foreign Affairs* 73 pp. 109–126.
- Singapore department of Statistics (2010) Census of Population 2010 Advance Census Release
- National archives of Singapore
<http://www.nhb.gov.sg/NAS/> 2011/06/08
- Speech by Prime Minister Lee Kuan Yew at the Opening of the Speak Mandarin Campaign on Friday, 21 sep 84, at the Singapore Conference Hall
- 日本外務省
<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/singapore/data.html> 2011/05/07
- シンガポール統計局
<http://www.singstat.gov.sg/pubn/popn/c2010acr.html> 2011/05/07

坂口可奈：シンガポールにおける「多人種主義」再考

ユーラシアン協会

<http://www.eurasians.org.sg/> 2011/01/08

プラナカン協会

<http://www.peranakan.org.sg/home/> 2011/01/08

坂口 可奈（さかぐち かな）

所 属 早稲田大学大学院政治学研究科博士課程

最終学歴 早稲田大学大学院政治学研究科修士課程

所属学会 東南アジア学会

研究分野 地域研究（シンガポール）